

患者の栄養管理をするのは誰？

机上で考えれば、栄養のことなら栄養士ということになる。同様に、薬のことなら薬剤師、処置や観察なら看護師と単純に考えられがちであるが、実際の現場では決してそうではない。

かつて友人が消化器系のがんの手術をしたあと、手術はうまくいったと言われながら急激に痩せていったのを目にした。見舞いに行った病室で、彼女はか細い声で「口から食べられないから」と言った。このとき、何が起きているのか、手術でなぜこれほど痩せてしまったのか、手術と栄養状態の関連はどうなっているのか、このままではがんではなく栄養失調で死んでしまうのではないかと不安になったことを覚えている。

誰が患者の栄養管理をするのか。そもそも病院のなかで、栄養士の数は多くない。いつも患者さんのそばで、その人の衣食住を気かけ、病状を観察し必要な処置を判断・実施するのは、多くの場合、ベッドサイドの看護師である。しかし、患者さんがどれだけ食事を取れたか、どのようなものなら食べられるか、栄養アセスメントとなるとそこまでできるかは疑問である。

そこで、NST(栄養サポートチーム)、すなわち医師や看護師、栄養士たちが、職種の壁を越え患者の栄養管理を行なう“チーム医療”が導入されるようになった。著者の東口高志氏は、日本でNSTを推進してきた第一人者である。氏の講演がきっかけで、当時勤めていた病院で

もさっそくNSTを立ち上げたという経験がある。10年以上前のことだ。いまでこそ診療報酬でも評価されるようになったNSTであるが、当時はチームで横断的に活動することで経費がかかったり、専門の異なるメンバー同士でうまくいかなかったり、導入施設ではさまざまな苦労があったと思われる。

看護師自身のための 栄養管理という視点

そんなとき本書があったなら……。これからNSTを立ち上げようとしている方、あるいは現在活動中であるが問題を抱えている方に、きっとヒントを与えてくれると思う。本書は「いつ」「誰が」「どのように」に加えて、「なぜ」栄養管理を行なうかが丁寧に解説されている。さまざまな専門分野から栄養を捉え、生理的・病理的な原理を述べたうえで、アセスメントする方法を示している。本書をチームの媒介物(道具)にすれば、チームにとって必要な情報を共有しやすく、より活動がスムーズになるだろう。

さらに本書は、詳しい栄養管理の本とだけでなく、医療職の生き方も考えさせられる。東口氏も述べられているように、「患者さんのため」、ひいては医療者である「あなた自身のため」になる知識にあふれている。NST看護師だけでなく、栄養管理の最終実行者であるベッドサイドの看護師、そして看護学生たちにもぜひ読んでもらい、将来、積極的に栄養管理にかかわってほしいと思っている。



「治る力」を引き出す
実践! 臨床栄養

東口高志 編
定価 3780 円
(本体 3600 円 + 税 5%)
医学書院
TEL. 03-3817-5657

栄養管理から生き方を考える ——医療の未来に向けられた一冊

坂本すが³ 東京医療保健大学看護学科学科長・教授

評
BOOK